

13	豊橋	二川中学校	カミムラ サユミ 名前 上村 沙悠美
分科会番号	19	分科会名	読書・学校図書館

仲間との交流によって読書の新たなおもしろさに気づく生徒の育成  
～3年・国語「握手」の実践を通して～

1 はじめに

本校では、朝の活動として10分間の読書の時間を設けている。そのため、生徒は毎日少しではあるが読書をするという経験をしている。本学級で今年度実施したアンケートによると、「あなたは読書が好きですか」に対して「とても好き」「好き」と答えた生徒は約8割であり、読書に対して肯定的な感情をもつ生徒が多いといえる。読書が好きな理由としては、「好きなように想像できて、結末の予想が楽しいから」「いろいろな知識を知ることができるから」「落ち着いた空間で本の世界に入り込めることが好きだから」などが挙げられた。しかし、「あなたは、本や読書について友達や家族などと話をすることがありますか」に対して、約7割の生徒が「あまりない」「全くない」と答えた。「本や読書について友達や家族などと話をすること」をしない理由としては、「読書が話題にならない」「習慣がない」などそもそも読書による交流がないことが挙げられた。一方で、友達や家族と話をする生徒は、「自分とは違った意見や展開を一緒に考えるのが好きだから」「友達や家族が読んでいたおすすめの本をお互いに読んで楽しむことができるから」などの理由を挙げた。アンケートの結果から、本学級では、読書を楽しむことは多くの生徒ができているものの、自身の読書体験を他者と交流し自身の読書活動をより充実させていくことができるのは一部の生徒に留まっていると考えられる。実際に教室を見渡しても、友達同士で読書について語り合う姿は一部の生徒にしか見られず、集団として読書を楽しんでいる姿はあまり見られない。

そこで、仲間と本について語り合う場を設定すれば、生徒は同じ本を仲間と読み深める楽しさや自分では気づけなかった魅力を知り、読書の新たなおもしろさに気づくのではないかと考えた。これまで読書について交流する経験の少なかった生徒は仲間とともに読書する楽しさに気づき、今まで限られた仲間と交流してきた生徒はさまざまな捉え方にふれて改めて仲間と本を読む楽しさに気づくだろう。自分とは違った意見にふれることができるように、一つの物語を小集団で異なる視点で読み進めていくリテラチャーサークルの手法を取り入れる。また、本に対する自分の考えを人に伝えたいという思いを高めるために、終末に生徒の関心に応じてビブリオバトルやPOPコンテストなどの言語活動を取り入れる。

リテラチャーサークル (LC)

1990年代から2000年代にアメリカで盛んになった読書指導法である。リテラチャーサークルは、Literature (文学)、circle (集まり) から、文学を仲間と同じ時間に同じページを読むことを基本としている。日本では足立幸子氏がハーベイ・ダニエルズの手法を紹介している。ダニエルズの提唱するリテラチャーサークルは参加者の役割が明確に分けられる点に特徴がある。

今回の実践ではリテラチャーサークルの手法として以下の2点を取り入れる。①4～5人のグループで同じ本(今回は教科書掲載作品である井上ひさし著「握手」を扱う)を読んで話し合うこと。②読む際に、各自役割をもち、その役割に沿って読み込んでいくこと。また、②の役割については、コネクター、スポットライター、クエスチョナー、アクターの四つを設定した。コネクター、スポットライター、クエスチョナーについては島田絢子氏の先行研究をもととし、アクターについては「握手」において人物の動作が作品の中で大きな意味をもつことを鑑み、新たに設定した。それぞれの役割の詳細は以下のとおりである。

コネクター：自分に置き換えて考える

スポットライター：普段使わない、文学的表現を見つける

クエスチョナー：登場人物の気持ちや言動の理由が直接的に書かれていない叙述から質問を作る

アクター：印象に残る登場人物の動作を見つけ、その人物になりきって動作化する

## 2 研究の構想

### (1) 目ざす生徒像

仲間との交流によって読書の新たなおもしろさに気づく生徒

### (2) 研究の仮説

国語科の授業において仲間と本について語り合う場を設定すれば、生徒は同じ本を仲間と読み深める楽しさや自分では気づかなかった魅力を知り、読書の新たなおもしろさに気づくことができるだろう。

### (3) てだて

ア (ア) 読みの視点を獲得し、(イ) 自分とは異なる意見(考え)にふれるためのリテラチャーサークル

イ 本の魅力を人に伝えたい思いを高めるための読書活動(ビブリオバトル・POP作成)

### 単元構想図(全8時間)

時	視点	活動内容	司書教諭・学校図書館司書
1	ア ①読みの視 点の獲得 ②異 なる意見 にふれる	「ごんぎつね」でリテラチャーサークルの手法について学習する	【司書教諭(国語科担当教員)】 担当する視点に沿って自分の読みをもつことができるように朱書きや対話を行う 【司書教諭(国語科担当教員)】 机間巡視し、グループでの読みが深まるように声かけを行う
2		「握手」を読み、グループの中で担当する視点を定める	
3		担当した視点に沿って物語を読み、考えたことをグループの仲間に伝える	
4		同じ視点の者同士で集まって自分の考えを伝え、多くの人が着目した箇所や追究したい課題について話し合う	
5		視点ごとに追究したことを全体で共有する。はじめのグループに戻り、全体発表では取り上げられなかったが自分が興味深いと感じた箇所について交流する	
6	イ 人に伝えたい 思いを 高める	学校図書館司書と司書教諭(国語科担当教諭)によるミニ・ビブリオバトルの模範演技を観たあと、ミニ・ビブリオバトルの準備をする	【司書教諭(国語科担当教員)・学校図書館司書】 ビブリオバトルの模範演技を行う
7		グループでビブリオバトルを行う	
8		グループの代表者を選出し、学級全体でビブリオバトルを行う	

## 3 活動の実際

### (1) 視点を獲得する〈第1時～第3時前半〉(てだてア—(ア))

第1時は、リテラチャーサークルの実践を行うことが初めてということもあり、「握手」を読む前に既習教材である「ごんぎつね」を取り扱い、リテラチャーサークルで用いる四つの視点についての学習を行った。生徒Aはスポットライターとして「青いけむり」に着目して「兵十のショック」を表していると考えたり、アクターとして兵十が火縄銃をばたきと取り落としてしまったのは「自



あまりわからないので、次回考えたいです」という振り返りを書いていた生徒Dが、第4時の振り返りには「交流を通して、最後に指を打ちつける意味は、解釈が分かれるなどと思いました。次回は、他のグループの意見も聞いて、更に深めていきたいです」と振り返っており、同じ視点同士で集まって考えを交流したことで、不明瞭だった考えが明確化し、さらに、自分とは異なる新たな解釈にふれ、自分の読みをより深めていこうという意欲を高めることができたと考えられる。

第5時前半では、視点ごとのグループで設定した課題に沿って追究したことを全体で共有する場を設けた。【3ページ資料2】一つのグループの持ち時間は5分程度とした。全体での共有が終わった第5時後半では、はじめのグループに戻り、全体では共有しきれなかった、各視点のおもしろい読みについて交流した。第5時の振り返りには、「クエスチョナーのテーマについて、私はなにも言わずに亡くなったルロイ先生への怒りや悲しみだけかと思っていただけ、もっとできることがあったんじゃないかという自分への後悔の気持ちも見つけられておもしろかったです」や「いろいろな視点を知って、なるほどと思いました。スポットライターの題名に着目したところがおもしろいなと思いました」などと書かれており、他の視点の考え方を知ることでおもしろさを感じるとともに、作品への理解を深めていることがわかる。また、「他の人たちの意見がわかってなっとくするところがたくさんあったので、もう一度読みたいです。この意見に出てこなかったものもさがして読みたいです。自分のオススの本を四つの視点から読んだらすごくおもしろそうだなと思いました」という振り返りの記述もみられた。【資料3】

他の人たちの意見がわかってなっとくするところがたくさんあったので、もう一度読みたいです。この意見に出てこなかったものもさがして読みたいです。自分のオススの本を四つの視点から読んだらすごくおもしろそうだなと思いました。

【資料3】第5時の振り返り

(3) 人に伝えたい思いを高める〈第6時～第8時〉

本学級では、一部の生徒の間において SNS 上で本の紹介をしている TikToker のけんごさんが

話題となっていたことや、昨年度の授業でビブリオバトルを行った生徒がいたこともあり、本を薦めるための効果的な方法としてビブリオバトルが支持されていた。そこで、第6時の冒頭では、学校図書館司書と国語科担当教員の協力のもと、ミニ・ビブリオバトルを行った。授業時間の兼ね合いから、発表時間が3分間であるミニ・ビブリオバトルを採用した。その際、教師は第5時までの実践とつながりをもたせるために、四つの視点から物語の魅力をつめるワークシートへの記述をもとに発表を行った。【資料4】模範演技を終え、チャンプ本が決定した後、「おもしろかった」「読んでみたくなった」「難しそうだけど、自分もやってみたい」という声があがり、早速ミニ・ビブリオバトルの準備に取りかかることにした。ビブリオバトルで大切なのは、自分がその本のおもしろさをたくさん知っていることだと伝え、第5時の振り返り【資料3】を紹介した。その上で、四つの視点で教師自身も自分のお薦め本を読み直したことを伝え、教師が書き込んだワークシートを示した。【資料

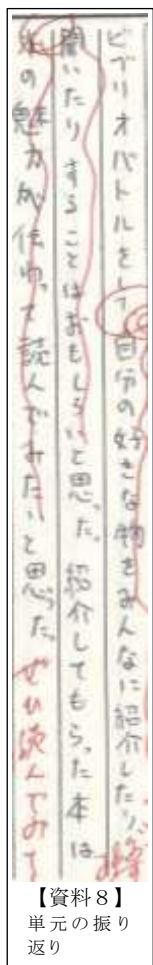
わくわくBOOK!!!	
著者	近藤 史恵
コネクター	「この本は...」
スポットライター	「この本は...」
クエスチョナー	「この本は...」
アタラー	「この本は...」

【資料4】四つの視点で捉えるワークシート

4】ミニ・ビブリオバトルを行う日時を一週間後に設定し、第6時の残りの時間はお薦め本を四つの視点で読み直す時間とした。授業の振り返りには「すべて読みたくなるような説明の仕方ですごくおもしろかった」や「題名について話すのもおもしろくて、いいと思った。私も皆がこの本を読みたいと思えるような本の紹介をしようと思った」「ビブリオバトルを見て、どの人もその物語の好きなところやおもしろいところの伝え方がとてもうまくて、その本が好きなことがよく伝わってきた。自分も好きな本をうまくおすすめするためにがんばりたい」などの記述があり、ミニ・ビブリオバトルを観戦したことで、お薦め本への興味が増したり、自分の好きな本を仲間に伝えたいという思いが高まったりしたことがわかる。

第7時は、前半20分を準備の時間、後半30分をミニ・ビブリオバトルを行う時間として設定した。ミニ・ビブリオバトルは、「握手」の読み取り時のグループで行い、発表3分、質疑応答2分の計5分を5回繰り返した。生徒は、仲間の発表に興味深そうに聞き、質問していた。発表者も聞き手も笑顔でよい雰囲気での活動ができた。全員の発表後、グループのチャンプ本を決定し、次時に学級全体でミニ・ビブリオバトルを行うこととした。

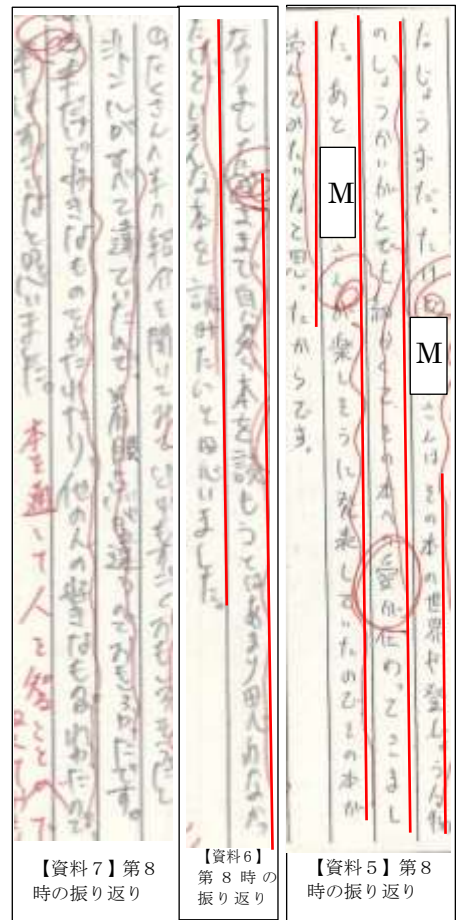
第8時は、グループ代表者によるミニ・ビブリオバトルを行った。グループ発表時と同じく、発表3分、質疑応答2分の計5分を7回繰り返した。発表生徒は緊張した面持ちだったが、どの生徒も持ち時間を十分に生かして堂々と発表していた。発表生徒の授業の振り返りには「やっぱり自分の好きなものを相手に伝えるのは少し怖いけどやっぱり楽しいことだと思いました」「ビブリオバトルをやってみて、自分は説明が下手でわか



【資料8】  
単元の振り返り

りにくかったかもしれないけど、本のおすすめのところや好きなところは、伝わったかなと思うのでよかったです」とあり、伝えることに難しさを感じつつも、好きな本について仲間に語るおもしろさも同時に感じていることがわかる。聞き手の生徒の振り返りには「その本の世界や登場人物の紹介がとても細かくて、その本への愛が伝わってきました。あと M さんが楽しそうに発表していたので、その本が読んでみたいなと思った」「今まで自分から本を読もうとはあまり思わなかったけどいろんな本を読みたいと思いました」などの記述があり、ミニ・ビブリオバトルで仲間のお薦め本を知ったことで読書意欲が刺激されていることがわかる。

【資料5】【資料6】また、「たくさんの本の紹介を聞いてみて、どれもすごくおもしろそうだし、ジャンルがすべて違っていたので、着眼点が違うのでおもしろかったです。本だけで好きなものを語れたり、他の人の好きなものがわかったので、本はすごいなと思いました」という記述も見られ、「本を通して人を知る」という新たなおもしろさに気づく様子も見られた。【資料7】また、「自分の好きな物をみんなに紹介したり、聞いたりすることはおもしろいと思った。紹介してもらった本は本の魅力が伝わって読んでみたいと思った」と振り返りを書く生徒も見られ、ミニ・ビブリオバトルを通して、自分のお薦め本を語るおもしろさにも生徒が気づいたと言える。



【資料7】第8時の振り返り

【資料6】第8時の振り返り

【資料5】第8時の振り返り

本学級では、本の魅力を伝え合う場として、ミニ・ビブリオバトルを設定したが、書店のPOPに興味を抱いた他学級では、POP コンテストを魅力を伝え合う場として設定した。ミニ・ビブリオバ

トル時と同じように、四つの視点でお薦め本を読み直すワークシートを使用し、「握手」を「コネクター」「スポットライター」「クエスチョナー」「アクター」で捉えた場合の教師作成のPOPを例として示した。また、どのようなPOPが効果的なのかを考えるきっかけとなるよう、学校図書館司書や図書館ボランティアの作成したPOPや全国学校図書館POPコンテストの優秀作品なども例示した。生徒たちは四つの視点で物語を読み直した後、POPの制作に取りかかっていた。制作終了後、POPコンテストを実施した。【資料9】POPとお薦め本を各自の机の上に置き、巡って仲間の作品を鑑賞する。POPを読んで本の中身が気になったら、手に取って読んでもよいことにした。生徒は仲間の作成したPOPを見て「なにこれ、気になる」「新たな一歩を進みたいあなたに、だって」などと言いながら本に手を伸ばしていた。POPによって、その本への関心が湧くとともに、自然と本にまつわる会話が生まれていた。



【資料9】図書室に展示されるPOPコンテスト優秀作品

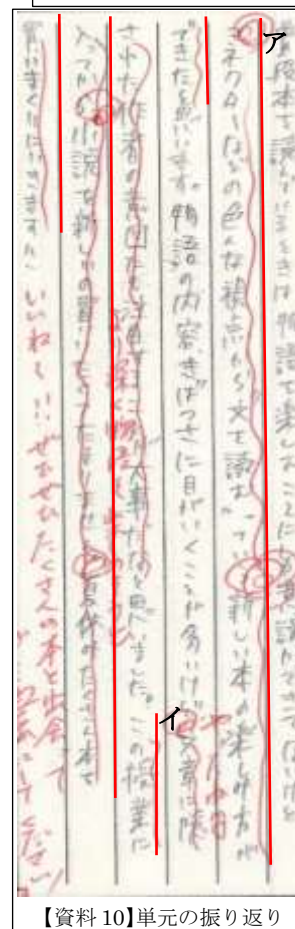
#### 4 成果

##### (1) てだてアについて

「リテラチャーサークル」の手法を取り入れることで、生徒は物語をさまざまな視点から見つめ直す楽しさを知ることができた。そして、それが読書意欲につながっていた。単元の終末の振り返りには、「コネクターなどの色んな視点から“文を読む”っていう新しい楽しみ方ができた」(資料10ア\_\_\_\_より)と視点を獲得したことで読書の新たなおもしろさに気づき、「この授業に入ってから小説を新しいの買いたくてたまりません。夏休みたくさん本を買いまくりにいけます」(資料10イ\_\_\_\_より)と読書意欲を向上させている生徒の姿が見られた。仲間の違う視点からの意見は、生徒にとって刺激的であり、更に読みを深めるきっかけとなったことは、生徒の振り返りから明らかである。よって、てだてアは有効であった。

##### (2) てだてイについて

本の魅力について伝え合う読書活動を設定したことは、生徒が本の魅力を伝えるおもしろさを実感したり、生徒の読書意欲を向上させたりすることにつながった。【5ページ資料8】また、てだてイは、仲間と自分の思いを語り合う読書活動が「ビブリオバトル」と「POPコンテスト」という異なる言語活動であっても、有効であるといえる。



【資料10】単元の振り返り

#### 5 まとめ

今回の実践を通して、生徒はさまざまな視点から物語を読むという読書の新たなおもしろさに気づけた。また、互いに自分のお薦め本を紹介し合うことで、より互いのことを理解するという経験を積むこともできた。しかし、「視点をもって読書する」という経験をさせたかったがために、友達に薦める本の選定を物語に限定してしまった。そのため、生徒の中には自分がいちばんお薦めしたい本とは別の本を紹介しなければならない生徒もいた。今後は読書の幅を広げることも視野に、時間が許す限りお薦めの本を紹介する場を設けることで、仲間との読書を楽しんでほしい。

#### 6 参考文献

塩谷京子編著、小谷田照代・山本泰子著「小学校明日からできる！読書活動アイデア事典」(2018)、島田絢子(2021)「小学校国語科学習におけるリテラチャー・サークルを援用した単元 開発ー2 年間の実践から有効性を検証するー」